

次郎長

題字 竹内宏

次郎長翁を知る会
会報「次郎長」
38号
令和元年6月1日発行
発行/編集
次郎長翁を知る会
会長 山田健司

清水港をお茶の輸出港へ

― 礎を築いた次郎長 ―

清水港開港百二十周年に寄せて

次郎長翁を知る会 会長 山田健司

清水港は三保半島が自然の防波堤の役割をはたして天然の良港と呼ぶのに相応しい状態であった。江戸時代、巴川沿いの清水湊は駿府の外港として位置付けられていたが、河口の川幅は狭く干満の差もあって大きな船は入れない難点があった。それでも四十二軒の廻船問屋は海上輸送などで活躍し、湊は繁盛し町の人々の生活を支えていた。

徳川家康以来二六〇年も続いた江戸幕府が終わりを告げた時、世の中は激しく移り変わろうとしていた。駿府も清水港も注目之地となっていた。

慶応四年七月二十三日、水戸で謹慎していた徳川慶喜は銚子から船に乗り清水

湊から上陸して駿府に入った。徳川家は静岡藩の所領七十万石となって徳川家達は八月十五日、江戸から陸路で駿府に入った。徳川家は格下げとなり駿府に移封したことで家臣たちは自らの生きてゆく道に迷い悩んだ。徳川家への忠誠心を捨て切れない家臣たちは、難民同然の無禄移住者となって江戸を離れ、ゴールデーンエイジ号を借り上げて上陸した。無禄移住者たちは近くの民家や寺院の本堂を借りて仮住まいした。人々は彼らを「お泊りさん」と呼んだ。波止場では移住者たちに粥などの用意をした。次郎長は子分達を引連れて炊き出しをしたり、雨露をしのご仮住まいの寺院を割り当てたり

の救援活動を行った。この次郎長の実体験が川湊から外海港の築港へと大きく舵を切るきっかけになっていったのではないだろうか。

日本近代統計の祖といわれている旧幕臣で静岡に移住した杉享二は叙伝の中で、次郎長と会ったのは明治元年か二年頃ではないかと云っている。そして江戸から移住者たちが続々と清水湊に上陸し次郎長はその世話をしていた。このことは旧幕臣たちの間で評判になっていた。杉享二と次郎長は開墾に適した場所として二人で有度山や三保を検分に行ったと書かれている。

次郎長はこの時、無禄移住者の授産事業まで考えていた。次郎長には先見性や時代を読む能力があったのである。

川湊から外海港へ

一方、明治維新は廻船問屋から今までの特権をはぎ取ってしまった。廻船問屋は最大の岐路に立ち、業種転換や廃業などに追い込まれ自己防衛のため自由競争

の道を選ぶしかなかった。

清水港を大型船の入る港にしたいの思いは、次郎長も廻船問屋の旦那衆も同じであった。堅気になった次郎長は、年下の四代鈴木与平（儀平）には頭が上がりなかつたようだが、とても親しい間柄で外海港のことを話し合っていた。清水港を川湊から外海港へ。明治元年から大型船が続々と清水にやってくる様子を、次郎長が自分の目で見てきたから、その必要性を痛感していたのだろう。



明治後半の清水波止場の風景。写真右は、開港と同時に出来た税関。中央『魚問屋』は芝罘。その左隅に船宿末廣の一部が見える。



遊覧船乗り場の傍りに露出した石積が「次郎長堤」

巴川を隔てた向島の地に、外海港築港への土地が白井首次郎によって提供され、明治十二年には港橋も新設された。波止場との交通は頻繁となり、廻船問屋も町も生まれ変わっていった。

外海港築港で次郎長は具体的に何をしたかという疑問はある。旧清水町の廻船問屋からは当時の一級資料が発見されているがまだ不明な事は多い。

清水港は明治十二年の築港以来、再開発や埋立てなどで波止場の状況は変わってしまった。いま当時をしのぶのは築堤した石積の一部がマリナーパーク南端に残り「次郎長堤」と呼ばれているだけだ。次郎長がリーダーシップを発揮して人夫

出しなどをして築堤したのだろうと推察している。

お茶の輸出港の礎に

安政六年（一八五九）幕府は諸外国と通商条約を結び、函館、新潟、横浜、兵庫、長崎の五港を開港した。

明治の清水港を貿易港へと導いたその夜明けは、外海に築かれた新しい港から、静岡社の静岡丸などがお茶を横浜に積み出したことから始まった。お茶は横浜から米国へ輸出された。清水と横浜間の航路は繁盛した。横浜には外国商館が

立ち並び、外国向けに再加工するお茶場で賑わった。

次郎長は富士開墾でお茶の生産を目指す一方、横浜に頻繁に通い輸出のため静岡の茶商人と横浜の輸出商人を結びつけるのに懸命になっていた。横浜の定宿であった神風楼の経営者山口桑蔵は、次郎長の最大の支援者であり二人は兄弟のようにしていた。次郎長はこの桑蔵を通じて多くの情報を得ていたと思われる。

静岡社が誕生したのが明治十四年、次郎長は明治十九年には波止場に船宿「末廣」を開業した。多くの人が訪れ情報交

換などの場所でもあって繁盛した。

明治新政府の外貨稼ぎは生糸とお茶の二本柱であった。「清水港をお茶の港へ」と次郎長が首領をとって蒔いた種は後輩たちの努力によって、次郎長の死後六年後の明治三十二年、外国貿易の開港場に指定され花開いた。そして明治三十九年、ついに日本郵船の神奈川丸がお茶の生産を誇った静岡茶を載せ、清水港から直接アメリカへ輸出する悲願を達成し、名実共に日本一の日本茶輸出港へと突き進んでいったのであった。

『咸臨丸事件・壮士墓建立一五〇年記念事業顛末記』

副会長 山本量正

三十年九月十七日。清水港に散った咸臨丸殉難者の大供養祭を営むとともに、事件を振り返り激動の明治維新を生きた次郎長と榎本武揚の二人の繋がりを語る記念講演を企画開催した。以下はその経緯と実施の報告である。

実施までの経緯

今回の特別事業は、平成二十九年一月の運営委員会において山田会長から、「平成三十年九月が『咸臨丸事件・壮士

明治元年九月十八日に清水港内で起きた咸臨丸事件は「俠客清水の次郎長」の名を一躍広め、人生を変えた出来事だった。次郎長の義挙は、山岡鉄舟や榎本武揚をはじめ多くの幕臣達の心を打った。次郎長は彼らに愛されて知遇を得、のちに社会事業家として地域の発展に貢献し、地元ヒーローとなった。

日ごろ我々は、この咸臨丸事件を「次郎長の功績の一つ」という点においては、かなり捉えがちであるが、この事件の主役

は不運にもこの清水港に散った春山弁蔵副艦長以下、咸臨丸乗組員であることを決して忘れてはならない。

「死ねば皆仏だ」と、処罰を恐れず殉難者を葬った次郎長の精神を引き継ぎ、これまでに小笠原長生代表の次郎長顕彰会、地元築地町の方々が殉難者の慰霊供養を行ってきた。我々次郎長翁を知る会も、その意思を引き継ぎ、墓域の改修や清掃と供養を行ってきた。そして壮士墓の建立より一五〇年の節目にあたる平成

墓建立」から一五〇年となることから平成二十九年度事業として「壮士墓」の墓域整備と解説のパンフレットを作成したい」と提案されたことに始まる。

その後月一回開催の運営委員会において事業計画が徐々に固まってきた。

墓域の整備は静岡市の文化財課の協力を得て、門柱の修復、樹木剪定など実施され、壮士墓パンフレット作成は山田会長の執筆で進められた。

そして、もう一つの柱として一五〇年の節目に合わせ三十年九月の「威臨丸事件」に近い日を選んで「供養祭」と催し物として「講演会」が計画された。

更に、その講演会については「威臨丸子孫の会」の協力も仰いでは、という提案から平成二十九年十月、山田会長と「威臨丸子孫の会」会員の尾駒眞理氏との話し合いがもたれ「榎本武揚」の曾孫である榎本隆充氏を軸に講師をお願いすることになった。

平成三十年三月十八日、副会長の石野、山本で「威臨丸子孫の会」の総会に参加し、会員の皆さんとの交流を深めるとともに九月の「威臨丸事件・壮士墓建立一五〇年記念事業」の参加協力などをお願いした。

平成三十年五月には当会発足時の発起

人である七代鈴木与平氏の鈴木株式会社様、後藤磯吉氏のはごろもフーズ株式会社様、佐々木哲雄氏の株式会社清水銀行様に特別事業への賛助・後援をお願いに伺いご高配をいただくことができた。

なお、この事業には静岡市、静岡市教育委員会、静岡商工会議所、(公財)するが企画観光局、NPO法人次郎長生家を活かすまちづくりの会、静岡山岡鉄舟会などの各団体様のご後援をお願いし、また株式会社天野回漕店様には壮士墓供養祭においてその駐車場を会場としてお貸しいただくなどご協力を得ることができました。

「講演会」については尾駒眞理氏のご尽力により榎本隆充氏、歴史作家の植松三十里氏に決定し、また「トークセッション」については進行役として勝海舟の玄孫である高山みな子氏にお願するなど記念事業にふさわしい構成となった。

そして「トークセッション」について



は事前に高山氏、尾駒氏と打ち合わせを行うなどスムーズな進行の準備に努めた。

「壮士墓」パンフレットは会報誌「次郎長」の印刷をお願いしている「ニシガイ」に発注し二、〇〇〇部印刷することにした。総会参加者、墓前祭参加者、講演会参加者延べ三〇〇人に配布され好評を得た。残部は「次郎長の船宿「末廣」」で頒布している。

記念事業実施報告

【午前の部】 壮士墓供養祭

当日の平成三十年九月十七日は、晴天に恵まれたが残暑厳しく午前中から三〇度を超える猛暑となった。そんな中、威臨丸子孫の会の会員の方々のほか一般市民を含め参加者は総勢八〇名に達した。(会員 一六名、子孫の会 三七名、一般 二七名)

供養祭は十時半から始まり、先ず山田会長からこの供養祭の意義、次郎長の功績について挨拶があり、その後「威臨丸子孫の会」の藤本会長からご挨拶をいただいた。

続いて梅蔭寺のご任職の読経の中、参加者が一人ずつ墓前に進み焼香し殉難者の冥福を祈った。



梅蔭寺住職の読経の中、壮士墓前に参拝する参加者

【午後の部】 記念講演会

記念講演会は清水駅東口の「清水テルサ」七階で開催され、来場者は一六五名とほぼ定員一杯の大盛況となった。(会員 二三名、子孫の会 三〇名、一般 一一二名)

講演会の総合司会はこの事業に多大のご尽力をいただいた尾駒眞理氏にお願いし十三時三十分を開始した。

山田会長の主催者あいさつに続き、来賓として静岡市長のご祝辞の代読があり、また子孫の会の藤本会長からもご祝辞をいただいた。

その後まず植松三十里氏から「咸臨丸清水入港の顛末」という演題で、パワーポイントの映像を使いながら、坂本龍馬による薩長同盟から説き起こし幕府による海軍創設、明治維新と話を進められ大政奉還から榎本艦隊の脱走そして咸臨丸の遭難から清水港への入港の顛末、咸臨丸事件までわかりやすく講演いただいた。



パワーポイントで講演される植松三十里氏

続いて榎本隆充氏から「清水次郎長と榎本武揚」という演題で、年表などの資料を駆使して、前段では榎本武揚の生涯についてその生い立ちから昌平黌、長崎海軍伝習所、オランダ留学、戊辰戦争、獄中時代、後半生について、そして後段



左より：高山氏、榎本氏、植松氏、山田会長、山本副会長

として次郎長の人となり、咸臨丸事件、咸臨丸殉難諸氏記念碑や次郎長の墓碑についてなど、次郎長と榎本武揚のつながりをお話いただいた。

その後「トークセッション」に移り、勝海舟玄孫の高山みな子氏をコーディネーターとして迎え、榎本隆充氏、植松三十里氏そして当会から山田会長と私山本が参加して、記念事業を行う意義、次郎長への思いと社会事業家としての功績について約一時間熱く語り合い、約四時間に及び記念講演会は大盛況という成功裏のうちに終了した。

以上

咸臨丸子孫の会より

咸臨丸子孫の会会長 藤本 増夫

昨年の咸臨丸事件・壮士墓建立一五〇年記念事業を主催された、貴「次郎長翁を知る会」と清水の皆さまに、咸臨丸子孫の会として、感謝の気持ちで一杯です。

一八六八年九月、清水に避難してきた咸臨丸が官軍に攻撃され、乗組員は切り殺され、海に投棄されました。次郎長翁は、その遺体を全て拾い上げ、この海岸の地に埋葬して下さいました。その後、この、次郎長翁の義挙に感銘した山岡鉄舟より、この墓地を壮士の墓と揮毫、そして、近隣の住民が中心となって、一五〇年の現在まで守り伝えられています。

私は、壮士の墓に葬られている乗組員の中で、当時の副艦長だった春山弁威(浦



講演に先立ち挨拶される 藤本増夫氏

賀奉行所組同心、長崎海軍伝習所第一期生、日本初の洋式軍艦「鳳凰丸」・蒸気軍艦「千代田形」の設計に従事した有能な技術者)が、深く印象に残っておりま

す。我が故郷、塩飽本島の塩飽勤番所に春山弁威が肉筆で描いた鳳凰丸絵図があり、清水の話もご子孫から伺っていたからだと思えます。また、ある塩飽水夫のご子孫の方から、ご先祖が清水で亡くなったかの話も聞いておりました。それは、塩飽勤番所の前が住居だった、渡米時最年少水夫、平尾宮三郎です。彼も同じ運命だったと知り、あの時、不幸にも官軍の攻撃により亡くなった土官や名も無き水夫達のすべてを手厚く葬ってくれた次郎長翁と、此の一五〇年、壮士墓を維持してこられた「次郎長翁を知る会」と清水の皆さまに感謝しております。

咸臨丸殉難者 供養祭に参加して

榎本武揚曾孫 榎本 隆充

平成三十年九月十七日、清水区に於いて「次郎長翁を知る会」主催による『咸臨丸事件・壮士墓建立』一五〇年記念事業が行われました。午前中は壮士墓境内で「咸臨丸殉難者供養祭」が行われ、午



講演される榎本隆充氏

後には植松三十里さんと私とで講演会、引き続き高山みな子さんの司会でトークセッションが行われました。参加者は一六五名で大変盛況でした。私の講演テーマは「清水次郎長と榎本武揚」でした。次郎長翁は言わずと知れた東海一の大親分ですが、咸臨丸事件の折には、新政府の「賊軍の死体に手を付けてはならぬ」というお触れが出ていたにも関わらず、身の危険も顧みず咸臨丸の戦死者を清水港から引き揚げ埋葬し供養して頂いた、幕臣にとっては大恩人です。榎本武揚も幕府海軍の総司令官として次郎長翁には深い感



榎本武揚揮毫「俠客次郎長之墓」

榎本武揚と次郎長の関係については会報 23 号にも詳しくあります。
(ホームページ <http://jirocho.com/kaiho.html>)

謝の念を抱いておりました。

時は移り明治五年以降、武揚は外交官、政治家として日本の近代化に努めておられますが、次郎長翁も任侠の世界とは縁を切り、富士の裾野の開墾、お茶の輸出等地域の振興に勉め、英会話の学校の設立などを含め地域のリーダーとして活躍します。明治二十六年六月次郎長翁は亡くなりますが、翌年三代目おちよさんが当時農商務大臣だった武揚を訪ね、次郎長の一周忌に墓碑の建立をする折、墓碑銘の揮毫を依頼します。武揚は、次郎長翁には多くの友達が大変世話になっているからと快く受諾し「俠客次郎長の墓」と揮毫しました。梅蔭寺にある次郎長翁の墓には一二五年経た今でも、沢山の参拝者が後を絶たないと言われています。

『市原市訪問記』

運営委員 府川 充宏

平成三十年十月二十四日、次郎長翁を知る会・秋の探訪ツアーとして、千葉県市原市に伏谷如水墓参」を行いました。朝七時、清水駅東側みなと口を、十五人でマイクロバスで出発いたしました。

十時三十分〜十二時、



谷中全生庵の山岡鉄舟墓前にて

谷中の全生庵と霊園を訪問しました。全生庵では山岡鉄舟さん、近隣のお寺では高橋泥舟さんの墓参をいたしました。

谷中の霊園には徳川慶喜公の広い墓域があり、柵外より拝詣いたしました。

市原市へと移動するバス内で弁当昼食の間、墨田区業平の妙見山法性寺前を通りました。このお寺は、清水の梅蔭禅寺に眠る次郎長翁の墓石を用意した方の墓があり、その墓石は次郎長翁の墓石の半身であるとのことでした。次郎長翁に心酔した人が、海山離れた江戸に居たと判りました。

やがて市原市に着き、地元の「鶴舞藩

を知る会」の皆さんの歓迎を受けました。早速、急な山道を登り、伏谷如水墓地を訪問供養しました。

地元TV局の撮影があり、一五〇年程前の伏谷如水と次郎長との巡り合いが、幕末維新の混乱を少しでも平穏に移行する大切な巡りあわせであった事を今更に感じる一時でした。

市原市は明治維新直後、鶴舞藩が統治しており、藩校克明館跡地に現在の鶴舞公民館があります。私共十五人と鶴舞藩を知る会の皆様十名程で茶話会が行われました。両会の人総ての人が、夫々の故郷を愛し、夫々の歴史を大切にし、人と

人との結びつきや絆を大切に集まりと見えました。

十五時三十分、次第に夕方の雰囲気公民館の建物や樹木の間には漂いはじめ、全員で記念撮影をし、盛んなお見送りの手を振って下さる姿を背景に帰途に着きました。

「海はたる」では海の夕焼けに感動し、十九時四十五分ごろ清水駅東口に着きました。

誠に実り多く、学習する事の多い旅でした。誠実な皆さんにお会いした良い旅でした。



鶴舞の伏谷如水・次郎長記念碑の前にて

次郎長こぼれ話

次の新しい一万円札の肖像画が渋沢栄一と決まり話題となっている。渋沢は徳川慶喜に任せ、留学先のフランスから帰国すると駿府の慶喜の許で、商法会所（金融と商社）の設立や殖産の振興など、藩の財政の立て直しに貢献した、静岡ゆかりの人物である。明治二年、清水湊随一の豪商で次郎長のスポンサーでもあった松本屋平右衛門は、渋沢の経営の思想に呼応し太政官札を大量に引き受けた。平右衛門は奮然起して自らの商売を拡張しその返済に当たったが、心労がたたり明治四年に四十一歳の若さで死亡。家業も経営の蹟きから没落の道を迎えた。次郎長はこの平右衛門に誘われて「清国」へ商業視察の渡航を計画していた。次郎長の海外へ向けた目や殖産への興味は、平右衛門を通じて芽生えたものだったのかも知れない。

その平右衛門の弟、中井俊之助は次郎長の養子にもなった天田五郎（愚庵）とも親しく、次郎長を親父の様に慕っていた。俊之助は後に町会議員となって清水港を特別輸出港指定に向けて大運動を行った。志半ばで没した大商人の兄と、



中井俊之助

清水港をお茶の港へと推し進めた次郎長の想いは、この後輩たちの努力によって明治三十二年（一八九九）の「清水港開港」へと繋がった。（中田元比古）

【編集室から】

・会報三八号をお届けいたします。九月は感臨丸事件一五〇年事業、十月は市原市鶴舞への「秋のツアー」と、大きな仕事を成し充実した年でした。

・藤本会長をはじめ感臨丸子孫の皆様には、日本各地から遠路足を運んでいただきまして誠にありがとうございます。そして子孫の会と次郎長翁を知る会との間で架け橋となつてこの事業を大成功に導いて下さいました尾駒眞理氏にあらためて感謝の意をお伝えいたします。

・市原市へは平成十二年以来の訪問でした。伏谷如水翁生誕二〇〇年にあたる

年に墓参と市原の皆さんとの再交流を果たせて良かったです。鶴舞藩を知る会の皆様そして代表の塚原茂氏に感謝いたします。また途次の谷中靈園付近を案内していただいた東京在中の石原雅彦氏にもお世話になりました。お礼申し上げます。

・今年の次郎長巷談のテーマは「次郎長を巡る人々」。第一回九月十八日の「次郎長の子分衆」を皮切りに毎月連続で計四回の開催予定。

・恒例次郎長探訪ツアーは、十月三十日（水）「荒神山」三重方面です。

・次郎長ウォーキングは令和二年二月頃。石松の仇を討つた追分事件を追いながら都田吉兵衛供養塔へと歩きます。来たる令和二年（二〇二〇年）は次郎長生誕二〇〇年です。PRを含め今年も様々な事業に取り組んでいきたいと思っております。

次郎長翁を知る会

会報「次郎長」38号

令和元年6月1日発行

発行/編集

次郎長翁を知る会

会長 山田健司

事務局

（公財）するが企画観光局

清水事務所内

〒424-0806

静岡県静岡市清水区辻1丁目1-3

Tel 054-388-9181 Fax 054-388-9182

www.jirocho.com

minowa.jirocho@gmail.com